かささぎ　通信　第26号

2014年8月8日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一四年七月の「森三郎の作品を読む会」では、一九三三（昭和八）年二月号初出の次の二作品を読みました。

「うんすんガルタ」（筆名　秋本きみ）

「笛」（森三郎）（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

「うんすんガルタ」（あらすじ） 呉服屋「越後屋」の子で、十二歳の長吉は、寺子屋の友だち・與市が持ってきた「ウンスンがるた」に興味をひかれる。與市が「お公卿さまや、お姫様のたくさんいる絵草子」となら交換してもよいというので、妹のその絵草子ととりかえっこの約束で、ウンスンがるたの中から、赤い菱形の印の付いた女の人の絵札をもらいうける。家に帰って絵札を眺めていると、絵の女の人が浮かんできて、氷のような冷たい手で長吉の手を握り、木の台に寝かせる。長吉はどうやら催眠術をかけられたようになるが、我に返るとおそろしさのあまり、その絵札を火鉢の火の中に投げすてる。與市に渡すため妹から絵草子をもらった長吉は、「あんなカルタ札なんて、ほしがらなければよかったのに」と、後悔する。

「笛」（あらすじ） 右大臣藤原仲平の子、朱實は十二になるが、ひどく癇が強く聞き分けがない子であった。北風の吹きまくる寒い日に、どうしても外に出たくなった朱實は、自分と同じくらいの年の男の子がショウガを売って歩いているのを見て、気の毒に思い、乳母に言って、ショウガを買ってやる。朱實は自分がいいことをして、えらくなったような気持ちになる。それからしばらくして、三井寺にお参りに行った帰り、小さな藁屋根の家から、澄んだいい笛の音色を聞く。それは先日のショウガ売りの男の子が自分で作った篠笛の音色だった。朱實はその笛がほしくてたまらず、いやがる男の子から無理矢理それをもらって帰る。しかし、朱實が吹いても笛はいい音を出さないので、朱實は笛を庭に放り投げる。その後、雪の日に雪山を作っている時、雪の中からこの笛を見つける。朱實は、この笛を取り上げた時の男の子の泣き声を思い出し、どんなに恨んでいるだろう、怒っているだろうと思うと、悲しくなって泣きじゃくる。

感想 「森三郎の作品を読む会」の中で自由に出された感想を紹介します。

◇同じ号の中に、時代設定は江戸時代と平安時代と異なっているが、類似のテーマの二作品が掲載されていることが、大変興味深かった。長吉の後悔は、涙をためながら何も言わずに絵草子を差し出してくれた妹の気持ちを想ってのことであり、朱實が泣いたのもまた、力のあるものに大切な笛を取り上げられるという理不尽に対し、抗議のすべもなく、泣くしかなかった男の子の悲しみに気づいたためであろう。

◇「ウンスンがるた」の長吉は、火鉢のそばで絵札を見ているうちにその世界に引き込まれていった。森三郎さんは、アンデルセンの「マッチ売りの少女」を意識していたのではないか。マッチの炎と共に幻影が現れる関係と似ている。

◇長吉も朱實も十二歳、「銀作」（昭和八年五月号）も「十二になる銀作は、身分低いさむらいの子で」と、始まっている。このころから、揺れ動く少年の心理を描く作品が多くなりそうなので、注目していきたい。

報告　森三郎童話紙芝居「柏野大納言」（森三郎刈谷市民の会制作・刈谷市教育委員会出版）が刊行されました。図書館で貸し出しできますので、どうぞご活用ください。

○次回予定　9月12日（金）午後1時～3時

「猿酒」（『赤い鳥』昭和8年3月号初出）

「雪」（『赤い鳥』昭和8年4月号初出・『森三郎童話選集　夜長物語』所収）